

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

全国屈指の果樹生産地で農産物直売所を法人化し、
CSR活動を意識した経営に取り組む

受賞者 のうじくみあいほうじん やっしろちやうのうさんぶつちよくばいしよ
農事組合法人 八代町農産物直売所
やっしろ
グリーンファーム八代
やまなしけんふえふさし
(山梨県笛吹市)

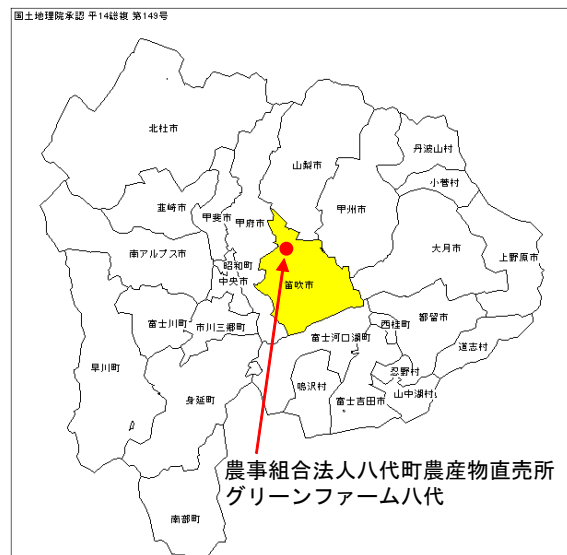
■ 地域の沿革と概要

山梨県笛吹市は甲府盆地の東寄りに位置し、笛吹川に沿って広がる平坦地を中心に南に広がる緩やかな丘陵地、北側は秩父山系から連なる山々、南側は御坂山地に囲まれた盆地地形である。

土壌は肥沃で排水がよく、日照時間が長いことに加えて昼夜の気温差が大きいなど、果樹栽培に適した土地で、日本有数の果樹産地となっている。特にもも・ぶどうの栽培面積と収穫量は、全国市町村の中で1位となっている。

笛吹市は、春には町全体が一面ピンク色に彩られ、桃源郷と称される当市特有の美しい景観となることから、平成25年4月に「日本一桃源郷」宣言をしている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集



写真1 桃源郷と称される景観

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

八代地区は笛吹市の南部に位置し、標高が250mから1,100mの立地条件を生かした、もも・ぶどうを中心とした果樹専作の経営が多く行われているほか、果樹を中心に野菜（スイートコーン、なす）や花き（きく）との複合経営を行うなど、経営資源を有効活用する経営体が育っている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 地域農業衰退の懸念と農村女性の潜在力を生かした農村社会の基盤づくり

果樹経営や果樹と野菜、花きの複合経営が行われている同地区であるが、平場地域では都市化の進行による農地の減少に加え、農業者の高齢化や後継者等の担い手不足に伴う労力低下、耕作放棄地の増加も問題視され、さらには中山間地域を中心とした有害鳥獣による農作物への被害の増加など様々な問題が生じ、地域農業の衰退が懸念される状況にあった。

県では平成2年から、農業の重要な担い手であり、家庭生活や地域社会活動への参加促進による多様な価値観の創造など、農村社会の活力に大きな役割を担っている農村女性の活動を支援するため、農村地域のリーダーとなる女性を「アクティブ農村女性」として委嘱し、その活動に対して支援を行う事業を始めた。八代地区では平成6年度から12年度の8年間に4名が委嘱され、農村社会の潜在力である「女性の力」で地域の活性化に取り組んでいくこととなった。

イ 多様な女性を登用した活動母体の結成

「アクティブ農村女性」として委嘱された4名は、日頃から地域社会の活動の中で地域の特産品であるももやぶどう、なすなどが、味は良いが見た目が悪いというだけの理由で規格外となり、畑に山のように捨てられている現状に、「もったいない」という思いを強く持っていた。

平成11年9月に「アクティブ農村女性」4名とJA婦人部長を加えた5名により「特産品開発研究会」を立ち上げ、規格外のもも、ぶどう、なすを利用して加工品開発に取り組み始めた。当時、地域には加工施設はなく、設備の整っていない公民館の調理室での作業であった。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧市町村単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	17.8%
	総世帯数 25,500戸
	総農家数 4,528戸
専業別農家数 (内訳)	
	専業農家 1,563戸
	1種兼業農家 914戸
	2種兼業農家 1,313戸
農用地の状況 (内訳)	
	総土地面積 20,192ha
	耕地面積 3,430ha
	田 60ha
	畑 3,370ha
	耕地率 17.0%
	農家一戸当たり耕地面積 0.8ha

ウ 直売所の建設

八代地区の農業者は、どのようにしたら地域を活性化できるかを検討し、活力のある地域農業を構築するためには、加工品や地域農産物を消費者に直接販売できる「農産物直売所」を核とした地域農業の振興を図る必要があるとの考えに至った。

平成15年7月に、特産品開発研究会の他、農業後継者会、JA青年部、商工会、観光協会、公募による非農業者の地区住民4名をメンバーとする「地域振興交流センター建設検討委員会」を設立し検討を重ねた。そして、平成16年6月に『地元住民及び他地域住民の交流の場、女性も気軽に出荷できる農業者の新たな販路開拓施設』をコンセプトとして直売所が建設された。施設の運営に当たっては、地域農業者を主体とする「八代町農産物直売所運営委員会」を設立している。



写真2 農産物直売所

エ 給食センターを地域のセントラルキッチンに

加工活動が軌道に乗り始めた「特産品開発研究会」は、活動の幅を更に広げられる施設はないものか苦慮していた。町村合併に伴い給食センターを取り壊す予定でいた八代町は、特産品開発研究会から同施設を加工活動の拠点としたいとの要請を受け、同施設を改装、平成17年4月に「八代農産物加工センター」が完成した。



写真3 セントラルキッチンとして利用されている農産物加工センター

特産品開発研究会はこの農産物加工センターができたことにより、地区内で加工品づくりに興味のある6名が新たに加わり、農村女性11名による加工活動が始められ、組織名を「八代町農産物加工組合」と改称した。

八代町農産物加工組合は、同地区で活動していた様々な加工グループをまとめ、加工センターを中心に活動の調整を行っており、農産物加工センターは、セントラルキッチンの様相を呈している。

オ 別々に動いていた2つの取組が1つになり法人を設立

平成22年4月にこれまで独立して活動していた「八代町農産物加工組合」と「八代町農産物直売所運営委員会」が一つになり、「直売施設」を拠点とした地域振興に取り組むため、「農事組合法人八代町農産物直売所グリーンファーム八代」（以下「グリーンファーム八代」という。）が誕生した。

(2) むらづくりの推進体制

ア 「農事組合法人八代町農産物直売所グリーンファーム八代」の概要

グリーンファーム八代は、笛吹市八代町の農業者を中心とし、組合員168名（正組合員110名、準組合員58名）で構成され、うち女性は78名と約半数で、直売所へ出荷する組合員も女性が多いのが特徴となっている。

運営役員は、代表理事1名、副代表理事1名、理事3名、監事1名で構成されており、理事会の下には、果樹部、野菜部、加工部、花き部の4部と直売所がある。組合員は、それぞれ生産販売する品目に応じた部に所属しており、果樹部82名、野菜部89名、加工部110名、花き部25名で構成されている。また、直売所は女性店長が切り盛りしており、女性の目線ならではのきめ細やかな店舗経営を行っている。

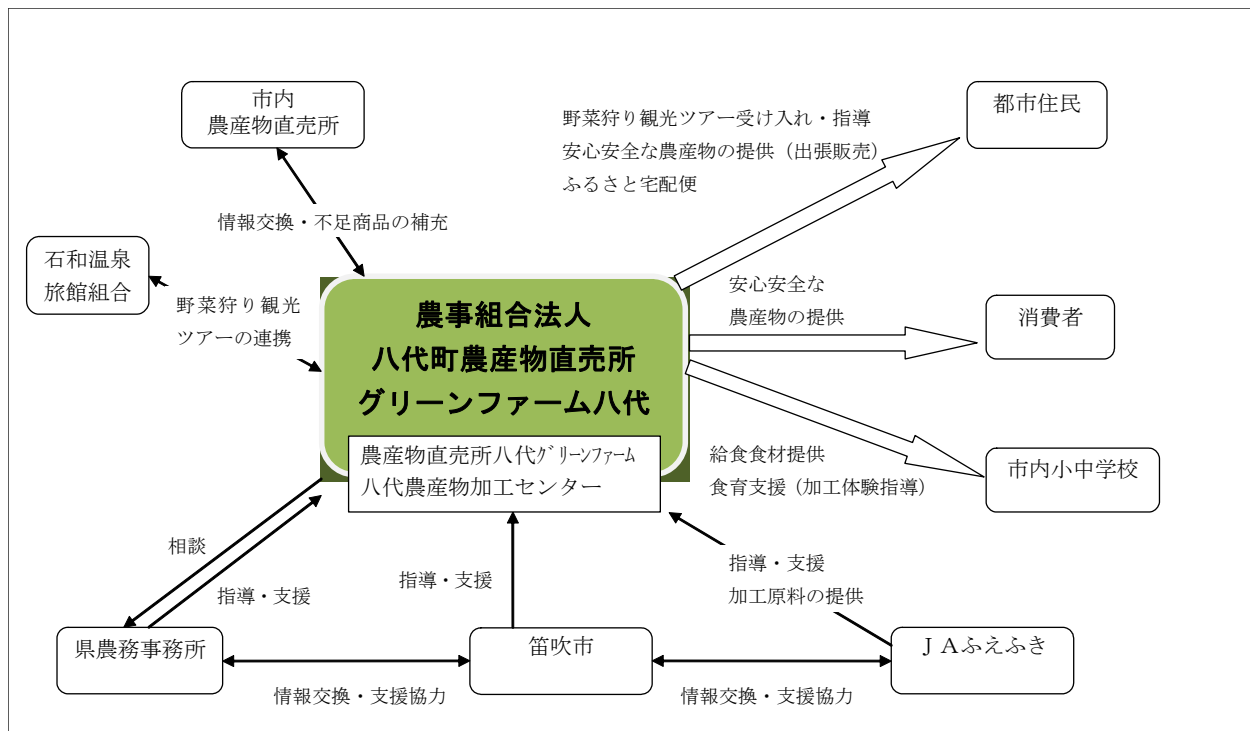
イ 事業活動（social responsibilityの発想）

グリーンファーム八代の活動は、直売所の年間購買者数も延べ数88,586人（平成24年度）で、地域の交流施設として定着している。平成22年に法人化したことにより組織化され、将来に向けて地域の農業後継者の育成や商品開発から販売までの戦略を立てるなど、経営感覚を持った事業活動を行っている。

また、グリーンファーム八代は、法人の活動のあり方にはCSR（企業の社会的責任）の考えが必要であると認識している。農業者のみが成果を享受できれば良いという発想では今後地域社会が崩壊してしまうとの考えの下、消費者や地域住民、行政や地域の企業などと協働しながら、お客様に喜ばれ、かつ、地域社会が良くなるように事業を行っている。

具体的な活動には、①加工部の女性を中心とした加工商品開発②市内全小中学校へ給食食材の提供を通じて行っている食育活動③環境に配慮した農業の推進④耕作放棄地を借り受けて農地へ復元し、地域の共有地として活用⑤石和温泉旅館組合と連携した観光農園の取組⑥八王子駅前での出張販売⑦環境保全活動⑧笛吹市社会福祉協議会と連携した障害者雇用⑨東日本大震災被災者の受入れなどがある。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

グリーンファーム八代は、地域の農村内外女性の「もったいない」という思いから始った加工活動と、地域住民の悲願であった農産物直売所の設置・運営がCSRという考えで一元化され、農村社会の潜在力たる「女性の力」によって運営活動が実践されている。

当該農事組合法人の活動は、地域農家の参加が増えるなど広がりを見せており、「農産物の直売」という地域農業者の共通の活動を通じて、地域住民の交流が深まり、更に地域農業振興に向けた課題の発掘と実践へとつながっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 地域農家の生産と販売活動の活性化

農産物の直売を始めた頃は高齢の生産者が大半であったが、後継者の育成により世代交代が進み、40～50歳代の生産者が増えている。農産物直売所は「女性が気軽に出荷できる場」として定着しており、販売額は、平成17年度の64百万円から平成24年度には125百万円と、7年間で2倍の伸びを見せている。



写真4 加工部のみなさん

これらの活動を通じて、組合員の意識は、最初はただ単に「出来たものを売る」だったのが「作ったものを売る」へ変わっていった。今では「お客さんに売れるもの＝どういったものがお客さんに売れるのか」を考えるようになり、組合員にマーケットインの考えが定着している。

(2) 食育等の取組

子供たちに対し、農業を理解して地域で生産される農産物を知ってほしい、食べ物の尊さを理解してほしいとの思いから、市内の全小中学校18校へ給食の食材として、地元産ももを使用したコンポートのほか、味噌やとうもろこしを提供しており、子供たちに大変喜ばれている。そのほか、小学校の授業に組合員が講師として参加し、子供たちにジャムづくりの指導を行うなど、食育活動に取り組んでいる。

また、石和温泉旅館組合との連携を強化し、加工部がメニュー開発した薬膳料理を盛り込んだ長期滞在型のリゾートを提案している。

(3) 農地の保全・耕作放棄地対策

平成22年の法人化以降、農地の維持保全につながる取組について検討しており、平成24年に、地区内にある耕作放棄地を借り受け、組合員が農地に復元し、じゃがいもやはくさいなどの栽培を開始した。

今後も耕作放棄地の復元を進め、農地の保全に取り組むとともに、復元した農地を利用し、新規就農を目指す担い手の研修ほ場としての活用を検討している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 地域での雇用の創出

地区農家の26%が参加するまでになっている当該農事組合法人の活動では、特に繁忙期となる収穫時期と農産物の加工作業時期が重なることもあり、非農家の女性をパート雇用し、加工作業に従事してもらっている。

また、直売所では、平成21年4月から笛吹市社会福祉協議会と連携し、障害者地域活動として障害者1名を継続して雇用している。



写真7 加工風景

(2) 農業の楽しさ、魅力を情報発信（都市住民との交流）

平成22年から、地元の石和温泉旅館組合と連携し、石和温泉を訪れる宿泊客を対象になす、とうもろこし、きゅうりなど野菜の収穫体験を実施している。ほ場は、野菜部組合員の所有する農地の中から選定し、収穫体験

のみならず、組合員の説明を通して、農業の楽しさや地域の素晴らしさを伝えている。

定期的なイベントとして、6月の「もろこし祭り」、7月の「もも祭り」、8月の「ぶどう祭り」、秋には「収穫感謝祭」を開催し、組合員全員が店頭に立って消費者との交流に努めている。

(3) 環境保全の取組

本地域は、春には一面がピンク色に彩られて桃源郷と見間違えるほど美しく、他の季節も直売所来訪者からすばらしい景観と評価を受けている。理由としては、直売所周辺に花壇を整備して環境美化に努めていたり、イベント開催前に組合員全員参加による施設周辺の除草や清掃作業を行ったりするなどの環境整備活動に取り組んでいることによる。

(4) 組合の将来を見据えた取組

グリーンファーム八代では、地域農業の担い手を育成・確保することが非常に重要であると捉え、農業を始めたいという人への支援に重点的に取り組んでいる。現在山梨県では、就農希望者の研修の受入れを行う農家を「アグリマスター」として委嘱しており、グリーンファーム八代は、平成22年度から組合員が「アグリマスター」の委嘱を受けられるよう誘導を図ってきた。これにより現在、6名の組合員がアグリマスターとなり、研修生を受け入れ、栽培技術の習得に向けた指導を行っている。今後は、グリーンファーム八代が「アグリマスター」として就農希望者の受入れができるように体制の整備を行っている。

(5) 東日本大震災被災者の受入れ

笛吹市は、山梨県の市町村の中で東日本大震災の被災者を数多く受け入れてきた自治体であり、グリーンファーム八代も福島県から八代地区に移住して新規就農した被災者を直売所の正組合員として受け入れている。被災者に対し、栽培作物の選定や営農指導を行うとともに、直売所での農産物や加工品の販売についても、スペースを特別に設けてポップを設置するなどしてフォローしている。